

氏名	蔡 瑩臻
ヨミガナ	サイ インジェン
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第640号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 陶芸による水平線の上下世界の芸術創造と表現 〈作品〉 Laputa-sky, Laputa-sea, Laputa-Mountain 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	豊福 誠
(論文第1副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	片山 まび
(作品第1副査)	東京藝術大学	准教授	(美術学部)	三上 亮
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	

(論文内容の要旨)

陶磁芸術は、日常で使われている陶磁器から鑑賞芸術としての陶磁器まで、生活の中に広く見受けられる。筆者は粘土を捏ねることを通して、自由かつ無限の方向性を感じつつ、思考そのものを伸張、反転させてきた。さらにそこに焼成技術を組み合わせ、作品に多くの異なる可能性を持たせるような創造を行うことが筆者の目的である。本論文は、筆者の制作のコンセプト、技法、考え方について論じるものである。

論文の構成は以下のとおり3章からなる。

第I章では、自作の最も重要なアイデアである夢、人間、現実、自然について、インスピレーションを受けた作品や自作を織り交ぜつつ論じた。筆者は、作品を通して鑑賞者が自身の理想を追求し、現実世界の中に夢を見出したり、ファンタジーを追求し、現実世界に埋もれて忘れてしまった夢を思い出す体験を呼び覚まし、鑑賞者の中に眠っている理想や夢に気付いてほしいと考えている。「時間や空間の概念が無い人間の内面」を表現することを目指し、水平線は分断のためではなく、夢の拡張のためにデザインしている。そのうえで本章第1節では、創作をするうえで夢を最も大切にしていることを論じた。夢には、寝ているときの夢と、現実の人生の理想としての夢がある。現実と夢は共に現実世界の中に存在するが、人生の夢を持つことがより重要である。人生の夢は、現実の様々な制約を超えた中から現れてくる。そのような発想を抱くようになる手助けとして、童話がある。童話やアニメ映画は希望と無限の可能性を喚起する。物語の美しさは虚構ではない、心への美しい贈り物であるとした。第2節では夢の実現のプロセスを、植物の開花にたとえて三段階に分け、それを「夢の転換」と定義した。種子には最も単純な想像力が含まれている。発芽は、人間で言うなら、幼少期である。人間は、幼い頃は誰でも無限の夢を持っている。そして夢は、人の成長によって開花する。その花は実になり、ふたたび新しい種を育てる。果物や種などの形は常に作品を創作するイメージとなっている。筆者にとって、種は生命の始まりの象徴である。種＝「現在」と開花＝「未来」を融合させ、溢れる生命力を作品に与える意味を込めたことを論じた。

第II章では陶芸の多面性という点で、作品の制作技法と筆者の素材に対する感覚について論じた。筆者はデザインと陶芸を区別して芸術を見るのではなく、それらを統合してひとつのものとして見る。筆者はそのこ

とを通じ、自分の価値観を尊重しつつも視点を変えることにより、新しい価値観や世界観を発見できるのでは無いかと推測する。それゆえ、それぞれの創作における材料や技法を変え、様々な表現方法を試すことに興味を持っている。本章第1節では、陶土と磁土について論じた。陶土による成形では、大きな作品はたたらと手捻りで制作して、自由に発展できる造形を目指した。作品本体はなるべく薄く軽量化したいため、陶土と繊維質を混ぜて、焼成後に作品の重量が全体的に軽くなることを目指した。磁土では泥漿成形の運用、粒状の質感表現と表面に貫入効果を加えた。第2節では、造形の方法について論じた。作品には軽く薄い質感及び透明感を表したいと考えており、泥漿鑄込み方式で制作した。たたら作り造形の成形の組み合わせ方法に関しては、2つの方法を中心に用いたことを示した。第3節では、制作の上で重視しているデザインと機能の要素を論じた。筆者は特に容器の内部と外部の空間が結合し、内と外が通じた状態を目指している。

第Ⅲ章では、これまでの研究と創作経験を振り返りつつ博士提出作品について論じた。作品群のテーマは「水平線」である。今、この瞬間に筆者たちのいる世界を基準として、見えている水平線の上と下にも、見えない世界は存在する。陶芸の多面性を模索するため、筆者は夢の空間を空、海、山に分ける3つの作品群を制作した。第1節では修了制作で用いた自分との直面、幻想の空間、サイケデリックな造形、瞬間の永遠化という4つのコンセプトを詳述した。第2節では、空をテーマにした作品である<L a p u t a - s k y>シリーズについて、第3節では海をテーマにした作品である<L a p u t a - s e a>について、つづく第4節では、山をテーマにした<L a p u t a - m o u n t a i n>シリーズについて論じた。第5節では、博士展の展示について論じた。

博士課程の創作では、自分自身が水平線の上下を行き来するような歩みを経た。陶磁器の専門知識を増やし、連続的な制作研究のなかで、他の素材との組み合わせなど、芸術の創造と人生経験をかき立てるより多くの可能性を試した。筆者の芸術研究の重要性は、即効性のあるものではなく、使用者との相互作用を通じて観賞者と交流し、心を癒し、美学を促進することにある。それによって生活と社会の調和を促進し、具体的な変化を実現できることを願っている。

(論文審査結果の要旨)

蔡瑩臻氏は、夢と現実、磁土と陶土、天と地といった二つの要素—まさに水平線の上下をたゆたうような作風を特色とする作家である。

本論文の構成は3章からなる。第1章では、作家のコンセプトの基調をなす夢と人間、現実、自然といった要素について、スタジオジブリ制作のアニメ<ラピュタ>など具体的なイメージ・ソースを挙げつつ論じる。特に夢を植物の種からの開花プロセスに例える点については興味を惹かれる。第2章では、制作のプロセスを追いつつ、泥漿や鑄込みなど特徴的な技法について論じる。デザイン出身ということもあってか、容器の内部と外部の関係性について、自作を中心としてデザインと機能の観点から詳述を行っている。第3章は、博士提出作品のコンセプト、制作プロセス、展示を中心に論を展開している。「逆転」のコンセプト、サイケデリックな形、瞬間の永遠化などのコアとなるワード、それが制作プロセスにおいてどのように表現されていったかについて、読者がトレースできるよう、つぶさに紹介がなされている。全体を通じて、作家が陶器と磁器、手びねりと型、軽さと重さ、天と地といった二つの要素をたゆたう様を丹念に記した論文といえよう。

論文の総評としては、夢や幻想といった言語化しにくい概念が多くあったにもかかわらず、具体例を挙げつつ、ひとつひとつ丁寧に言葉に置き換えた点を高く評価したい。また指導者が過去に指導した留学生のなかでも日本語能力が高く、文章表現能力も十分に備わっていた点も加えて評価をしておきたい。ただし、コンセプトと表現の関わりについてはよく論じられているいっぽうで、コンセプトと技法との関わり、素材との対話、陶磁器ならではの表現については、より深みのある言及が欲しいところであった。しかしながら、むしろこの課題は今後にゆだねられているといえ、これからも素材と継続的に向き合っていくなかで、容器の内側と外側の関係性、逆転のコンセプト、水平線の上下などについて、また新たな視覚からとらえなおすことも可能となるであろう。

以上のように論文が作品の背景を十分に説明するものであり、記述や構成も破綻なく構成されていることから、審査員の同意のもと博士学位に相当するものとして意見の一致をみた。

(作品審査結果の要旨)

蔡 瑩臻氏は、水平線をテーマに自身のイメージを形にするために陶芸の素材及びその技術を利用し、トポロジカルな浮遊感漂う立体作品を制作した。イメージの源泉は夢であり、ファンタジー溢れたポップな世界の創出には、自然のなかで夢を膨らませた幼少期の台湾の自然環境が影響している。作品のタイトルにある「Laputa」とは、ガリバー旅行記の「空飛ぶ島」から引用されており夢の空間を意味する。

陶芸では轆轤上で土が立ち上がること、すなわち、器形としての底と口の関係を前提として制作することが基本であるが、蔡 瑩臻氏の作品は上部と下部にわかれた世界が内部空間と外部空間を行き来するように形作られ一体化した形態がみられるという大きな違いがある。これを技術的な側面からとらえると石膏型鑄込み成形やタタラ型押し成形そのものが持っている制作上の構造と一致する点がある。シュルレアリズムやスタジオ・ジブリのアニメーション作品から触発されたイメージを蓄積させながら、陶芸の制作工程の中にある立体物の成り立ち方自体が、作品の形状となった。その実現には素材である陶土の軽量化を図るため、陶土に新聞紙を5%から10%混ぜる方法を確立し、型で成形したものに手びねりで形をつなげていく造形の方法のために石膏型の乾燥を防ぐ方法を考案した点など陶芸技法の常識にとらわれず作品制作を展開した。一方、陶芸特有の焼成を経ることで起きるマチエールを伴った彩色の変化などに関してやや平板さを感じる部分は、今後の課題としたい。

水平線の上下世界の造形は一般に陶芸作家が轆轤成形から発想する立体物とは違う様相を示している点、展示スペースにおいては、逆転のコンセプトのもと非日常の空間を表出させた点など、総合的に見て博士学位に相当する作品と評価する。

(総合審査結果の要旨)

蔡 瑩臻氏は、国立台湾芸術大学の工芸設計大学院を修了し、本学の研究生として入学した後、博士課程に進学した学生である。

博士論文と提出作品のテーマである水平線の上下世界は、台湾芸術大学時代の制作テーマの一つでもあり、来日当初の提出作品にその片鱗が見受けられた。三章からなる本論文の一章では、作品コンセプトでもある作者の夢に対する世界観をファンタジーやアニメ、シュルレアリスムなど自身の影響を受けた作品を上げ、また台湾の自然や果実などからイメージを積み重ねたこれまでの自作を例に、人間、現実、自然について論じている。第二章では、陶芸の多面性として制作工程から得られた実証的な成形方法と自作を例に上げた、デザイン、機能、材質、空間表現と論述を展開している。第三章では、博士修了制作のコンセプトと制作プロセスから成形技法と共に詳細な記述が工程写真を添えてなされ、後進の参考資料として貴重なものと言える。

提出作品「Laputa-sky」・「Laputa-sea」・「Laputa-mountain」は、「Laputa-sky」4点、「Laputa-sea」1点、「Laputa-mountain」2点からなる組み作品である。この3作品に共通するテーマの上・下と内・外の相對峙し、繋がりを持つ世界観は、作者の独特な感性で造形され非現実な夢の世界を創出する事に成功している。論文の第三章にある幻想の空間：「逆転」のコンセプト、サイケデリックな造形、瞬間の永遠化、の中で述べられた作者の素直な想いが想起される秀作である。経験を重ねた石膏型による成形技法は、制作するごとに進化しており常識にとらわれない成形法は新たな造形の可能性を予感させるものとなっている。また、展示方法にも工夫を凝らし、これまでガラスとの組み合わせによる作品を数多く手がけてきたが、作品の大きさに限界があり金属との組み合わせにより大作に挑戦出来たことは、今後の作品への期待を膨らます要素となるであろう。ただ、素材に対する解釈や焼成釉薬についての研究には多くの課題と可能性があり、さらなる研究制作を進めていく事に期待したい。

以上、論文と作品の整合性のとれた発表に、審査員の合意を得て博士学位に相当するものとした。